

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：64401

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2012～2016

課題番号：24401037

研究課題名(和文) セネガル、ニアセン教団における境界の超越とアフリカ諸国への拡大の比較研究

研究課題名(英文) Expansion of the Niassene Tijaniyya Order from Senegal to Other African Countries: A Comparative Study

研究代表者

盛 恵子 (Mori, Keiko)

国立民族学博物館・文化資源研究センター・外来研究員

研究者番号：30566998

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,700,000円

研究成果の概要(和文)：セネガルの学者イブラヒマ・ニアスは、イスラーム神秘主義教団ティジャーニーヤの分派ニアセンを創設した。ニアスは、すべてのムスリムは彼が案出した宗教的訓練タルビヤを受けて神を認識すべきであり、神の認識を得た者はすべての人類に対して、人種、国籍、宗教を問わず寛容になると説いた。セネガルと他の3か国で比較調査を行った。ニアスの寛容の理念は、モーリタニアのマータ・ムラーナ村では実現していた。しかしガーナのクマシでは信徒間に宗教的リーダーシップを巡る民族間対立があり、カメルーンのフンバンでは、ニアセンと改革主義者サラフィストとの対立がバムン王スルタンの権威を脅かしており、これらは理念に反する現実だった。

研究成果の概要(英文)：The Niassene Tijaniyya Sufi Order was founded by a Senegalese Shaykh, Ibrahima Niasse. He thought it necessary for all Muslims to undertake his spiritual training method, tarbiya, for the purpose of knowing God, because the knowledge of God is the foundation of the faith of Islam, and that it makes believers tolerant to all human beings regardless of race, nationality or religion. As concerns the teachings of tolerance, this comparative study conducted in the following 3 countries reveals how the situations of the Niassene communities are different. Niassene followers in Maata Moulana (Mauritania), have been constructing an ideal cosmopolitan city without racial discrimination. In Kumasi (Ghana), there are ethnical conflicts of religious leadership between Hausa and indigenous peoples. In Fomaban (Cameroon), the capital of Bamoun kingdom, the Niassene community and the Salafist community stand in opposition so furiously that they threaten the stability of the authority of Bamoun Sultan.

研究分野：文化人類学(宗教)

キーワード：イスラーム神秘主義スーフィズム ティジャーニー教団の分派ニアセン イブラヒマ・ニアスの宗教教育タルビヤ イスラームにおける男女の隔離と平等 ガーナのクマシ カメルーンのバムン王国とフンバン市 モーリタニアのマータ・ムラーナ村 セネガルのニアセン本拠地カオラック

1. 研究開始当初の背景

本研究の対象は、セネガルのウォロフ民族の学者イブラヒマ・ニース(1900-1975)によって1930年に創設されたイスラーム的集団であり、それはニースの名に因んだウォロフ語でニアセンと呼ばれる。ニアセン教団は、現アルジェリア出身のアフマド・ティジャーニー(1737/8-1815)によって創設されたイスラーム神秘主義教団であるティジャーニー教団の分派であり、アラビア語ではティジャーニーヤ・イブラヒミーヤという。

ニアセン教団はサハラ以南アフリカのみならず北アフリカの一部にまで拡大し、現代アフリカで最も大規模かつ注目される宗教的・社会的集団のひとつと評価されており[Hiskett 1980]、海外ではすでに多くの研究がなされている[Seesemann 2010 等]が、日本では調査されておらず、その実態は明らかでなかった。私は挑戦的萌芽研究(平成22~24年)「セネガルのイスラーム神秘主義教団ニアセンの研究」でニアセン教団の本拠地であるカオラックとその周辺において聞き取り調査を行い、その教義や信徒たちの宗教的実践に関して基礎的な調査を行った[盛 2014]。本研究はその継続発展として構想された。

2. 研究の目的

ニースは1929年に神の恩寵の光ファイダが自分に現れたと主張し、自分の弟子となってこのファイダに与った者は、イスラーム的知識の有無、老若男女を問わず「神を知る」(ウォロフ語で xam Ya'ala)ことができると宣言した。ニースの教えの特徴として

イスラーム神秘主義の修道者にとっての最終目的であるが、従来ほとんど専ら男性エリートのみが与ったところの神の認識の体験を、一般信徒に解放した

人種間の平等の強調

女性に学問を奨励し、指導者の地位にも登用した

が挙げられる。ニアセン信徒は教団指導者ムカッダムから、ニースが案出した宗教的訓練タルビヤを受けることによって神の認識体験を得る。ニースのタルビヤは、信徒が短期間のうちに容易に神の認識に到ることを可能にするとされる。「神を知る」とは、神は自己を離れて遠くに存在するのではなく、自己を含めた宇宙の万物に顕現していると悟得することである。セネガルのニアセン信徒たちは「人は神の認識体験を得ると、宗教・人種を問わず他者は自己と同じく愛し尊重すべき存在だと知る。従って人間の対立もなくなる」「イスラームにおいて男女は平等である」と語る。少数のエリートだけでなくすべての信徒がこの体験を得ることができるという期待と、ニースの教えに内在するところの国境・人種・性別の境界を超越しようとする意志が、ニアセン教団の世界的な拡大の要因だと考えられる。

セネガルでは、ニースの理念はある程度実

現しているように見える。現在セネガルでは、青年と女性の信徒のほぼ100%がタルビヤを経て神の認識に達している。この認識の体験は、教団の中で周縁化されがちだったこれらの層の人々に強い宗教的満足を与え、イスラームへの主体的な参加の意欲を植え付けている。またセネガルには教団公認の女性のムカッダムたちがあり、大勢の男女の信徒にタルビヤを与え指導しているが、このような女性の宗教的リーダーシップは、イスラーム世界においてきわめて稀な事例である。しかしセネガル以外の国のニアセン信徒の実情はどうか、ニアセン教団をめぐるどのような現象が生じているか、セネガル以外の3つの国を含めて比較考察する。

3. 研究の方法

調査地は、ニアセン教団発祥の地であるセネガル、ニアセン教団が最初期に受容されたモーリタニアのトラルザ地方、ニースのモーリタニア人の弟子によってニアセン教団が1940年代末に導入されたガーナのクマシ、1960年頃に導入されたカメルーン南西部のフンバンである。ニアセン指導者たちと一般信徒たちから聞き取りを行った。またそれらの地域の社会的・宗教的背景を知るために、ニアセン以外の教団・イスラーム的組織の人々からも聞き取りを行った。

4. 研究成果

(1) タルビヤについて

これらの3か国でも、セネガルと同じく、ニースの最大の功績は、タルビヤによって神の認識を容易にしたことだと語られる。またセネガルと他の3か国において、「神の認識」の本質的な内容として語られるものは同じだった。人は神の認識を得るとすべての人類に対して、人種・国籍・宗教を問わず寛容にすることができるという語られる。

しかしセネガルでは男女の信徒のほぼ100%が、イスラームの知識の多寡を問われずにタルビヤを受けるのに対して、他の3か国ではタルビヤを受ける信徒の割合が半分以下であり、また女性が受ける割合は男性に比して低かった。モーリタニアのモールと、ガーナとカメルーンのイスラームに大きな影響を与えたハウサはともにセネガルのウォロフに比して大衆のイスラーム化の歴史が古く、男女隔離の慣習を持つ。この慣習は、セネガルでは一般的でない。女性信徒はセネガルでは自分の意志だけでタルビヤを受けることができるが、他の3か国では夫あるいは父の許可を必要とする。またこれら3か国では、女性のムカッダムが家族以外の信徒を指導することもない。またモールとハウサのムカッダムはタルビヤを受ける条件として一定水準の知識を信徒に要求することが、タルビヤを受ける信徒の年齢を高くし、全体として信徒にタルビヤを受けにくくしている。

セネガルではタルビヤが青年と女性に宗

教的な意欲と主体性を与えていることを考えると、これらの層がタルピヤに与えることができにくいことは問題である。

(2) モーリタニアにおける世界市民的なイスラーム社会建設の試み

ニアセンは 1930 年代初めにモーリタニアのトラルザ地方のイダウ・アリー部族に受容された。この地方に住むイダウ・アリー部族は預言者ムハンマドの子孫とみなされており、かつ伝統的にイスラーム教育を担う部族として有名である。イダウ・アリー部の学者ムハンマド・ハーフィズ(1759 頃-1830)はモロッコからティジャーニー教団をもたらし、イダウ・アリーにそれを広めた。ムハンマド・ハーフィズによってティジャーニー教団に加入した信徒たちをハーフィズィーヤと呼ぶ。イブラヒマ・ニアスの父アブドゥライ(d.1922)はハーフィズィーヤの学者たちと親交があり、彼らは時にカオラックの彼の修道場を訪問した。イブラヒマ・ニアスはそのひとりアブダラー・ウルド・アル・ハジ(d.1927)に特に親しみ、彼を師と仰いだ。この人はファイダがイブラヒマのもとに出現すると予言したと信じられている。1931 年、ハーフィズィーヤの若い学者ムハンマド・ナフウィ(1910-2003)がカオラックでイブラヒマ・ニアスに会ってタルピヤを受け、ニアスのもとにファイダが出現したとハーフィズィーヤに伝えた。モールは伝統的に黒人を奴隷として使役し、黒人を蔑視していたが、ハーフィズィーヤの若い世代の学者の一部は黒人であるニアスの宗教的優越性を認め、彼の弟子になった。アブダラー・ウルド・アル・ハジの息子ムハンマド・ミシュリ(1917 頃-1975)も、ニアスの弟子となった。ムハンマド・ミシュリは 1958 年に伝統的な遊牧生活を捨てて定住し、マータ・ムラーナという村を作ったが、彼の息子アブダラー・ミシュリ(b.1954)は村長として、ニアスの教えに依拠した世界市民的なイスラーム共同体の建設に着手した。

アブダラー・ミシュリが特に強調するのは人種間の平等、女性に対する宗教教育、女性の主体的なイスラームへの参加の促進である。イブラヒマ・ニアスは 1931 年に書いた著書[Niasse 2010]の中で、黒人と他の人種は神の前で平等であること、女性も男性と同じく高い宗教的境地に到ることができることを強調した。2015 年における私の調査時には、マータ・ムラーナ村ではサハラ以南アフリカ諸国の学生たちに加えてベルギー人、シンガポール人、スペイン人、チュニジア人、ジャワ系南アフリカ人がイスラームを学んでおり、村は彼らに衣食住を提供して学業を援助していた。アブダラー・ミシュリはイスラーム教育と近代教育の両立を目指して村内の公立の学校にもさまざまな援助を提供するので、国内各地の親が、この村で学ばせるために男児を送ってくる。村には女性専用

のイスラーム学校もあり、そこでは男性用のイスラーム学校と同じ科目が教授される。村人たちはこの村に人種差別がないことを誇り、モール社会の伝統的な人種差別は、イスラームに照らせば悪であると語る[盛 2016]。

しかし私が調査したトラルザの他の村々のニアセンの学者たちのなかには、我々モール人はニアス以外の黒人の宗教的権威には決して服従しないという見解が見いだされ、伝統的な黒人蔑視の態度が見られた。黒人は白人と同じく尊厳に値するというニアスの理念は、モールのニアセン信徒の一部にしか受け入れられていなかった。

(3) ガーナ、クマシにおけるニアセン教団内の民族間対立

ハーフィズィーヤの学者マウルード・ファル(1773 頃-1852)はムハンマド・ハーフィズの高弟であり、サハラ以南アフリカ、特に北ナイジェリアやスーダンにティジャーニー教団を広めたことで有名である。マウルード・ファルの曾孫アル・ハーディー・ウルド・サイド(d.1982)は、1930 年代初めにニアスの信徒になり、ニアスは彼にナイジェリア、ガーナ、トーゴなどでの布教を命じた。マウルード・ファルの子孫であるという権威のおかげで、彼が宣伝したニアセン教団は現地で容易に受け入れられた。

ガーナにはすでに 20 世紀初頭に、現ナイジェリアから来たハウサによってティジャーニー教団がもたらされていたが、ニアセン教団はイスラームの中心地クマシに定着し、従来のティジャーニー教団に取って代わった。現在ガーナのムスリム総人口の約 7 割がニアセン信徒であり、残る 3 割は後述するサラフィストである。

クマシは旧アサンテ王国の首都であり、そこにはゾンゴと呼ばれる大きなムスリム共同体がある。クマシの住民であるトゥイの大部分は、ムスリムではない。クマシのゾンゴは 19 世紀末に成立し、その住人は外国起源の諸民族(ハウサ、フルベ、カヌリ、ヨルバ、ワンガラ、モシなど)とガーナ北部起源の諸民族(ダゴンバ、ゴンジャなど)に大別される。彼らは商業、兵役、プランテーション労働などさまざまな理由でクマシにきた。ゾンゴでは「ハウサ」(50 以上の民族が住むゾンゴでは、北ナイジェリアのハウサランドから来た、ハウサ語を話すハウサ、フルベ、カヌリを「ハウサ」と総称する。フルベとカヌリ自身も、自分たちはハウサとほとんど同じだと語る。以下この意味でのハウサは、括弧をつけて区別する)のリーダーシップが確立している。ウスマン・ダン・フォディオによるイスラーム改革運動の舞台となったハウサランドはイスラームの先進地域であり、ここから来た「ハウサ」は学者として名高く、また商人として経済力も持っていること、植民地時代の 1900 年に、イギリスがクマシでアサンテ王の権威に対抗させるため、サルキ

ン・ゾンゴというゾンゴの長の役職を作り、ナイジェリア生まれのハウサのイスラーム聖職者をそれに就けたことが、在来民族に対して「ハウサ」が優位に立った理由である。サルキン・ゾンゴは現在までに14代を数え、すべてハウサで占められている。現在に到るまでゾンゴの共通語はハウサ語であり、1960年代までイスラーム教育は専らハウサ語で行われた。

アル・ハーディーは1948年にクマシを訪問し、イブラヒマ・ニアスの教えを伝えた。1952年には、ニアス自身がクマシを訪問した。「クマシのBig Six」と呼び習わされる6人の学者が中心となって、ニアセンを宣伝した。他方ニアスのクマシ訪問に対抗するかのよう、ガーナ北部のタマレでは、ダゴンバの学者アフア・アジュラがサラフィズムの立場から反ニアセン教団の活動を始め、支持者を集めた。この支持は時に、イスラームにおける「ハウサ」の支配に対するダゴンバの反感として説明される[Saani Ibrahim 2011]。サラフィズムは預言者ムハンマドの時代のイスラームに回帰することを目指す復古的改革主義であり、ムハンマドの時代に存在しなかったイスラーム神秘主義や、イスラームと平行して行われるイスラーム以前の慣習を攻撃する。彼らはニアセン教団を、預言者ムハンマドの時代以降の逸脱として攻撃した。

クマシのBig 6は協力して、ニアセン教団普及のために活動した。しかし彼らは1人がダゴンバ、他の5人が「ハウサ」であり、その民族的帰属ゆえに、クマシのイスラーム的権威の頂点である中央モスクのイマームの地位を巡って対立し、ほぼ2年にわたるクマシ中央モスクの閉鎖という異常事態を招いた。クマシ中央モスクは、ニアスが1952年の訪問時にその場所を選定した。ニアセン信徒である当時のサルキン・ゾンゴがその建設の責任を負い、1958年に一応の完成を見た。しかし彼は大衆の寄付からなるモスクの建設資金の収支報告を行わず、批判を招いた。またモスクの管理は「ハウサ」に独占され、他民族は排除された。1968年にこのモスクの初代イマーム、ムハンマド・チロマが死んだ。彼は「ハウサ」であり、Big 6のひとりだった。この時代の「ハウサ」集団の宗教的リーダーは、Big 6の最年長者バーバ・マカラタだったが、彼らはBig 6の中の別の「ハウサ」、ガルバ・ハーキムを後任に就けた。在来民族のダゴンバとゴンジャを中心とする集団は「ハウサ」の支配に異を唱え、Big 6の中の唯一のダゴンバ、ナーシル・ディーンを後任に立てた。ここで「ハウサ」集団は中央モスクの所有権を主張して訴訟を起こし、他民族にはこのモスクの利用権も、イマームの指名権もないと主張した。この対立は、それぞれの集団が、それぞれ「ハウサ」のムスリムと在来民族のムスリムを支持基盤とする2つの全国的な政党を背景に持つことゆえに紛糾した。国家レベルにおいても、ガー

ナ経済の「ハウサ」による支配は在来民族の反感を買っており、両者は別々の政党に依って競合していた。1970年にプシア大統領の調停により、ガルバ・ハーキムがイマーム、ナーシル・ディーンがその補佐となり、今後2つの集団が交互にイマームと補佐を選出するという条件でこの問題は決着した。紛争の間中央モスクは閉鎖され、各民族は各々のイマームを中心に別々に金曜礼拝を行った。

現在も、ゾンゴがハウサのサルキン・ゾンゴとハウサの役職者たちによって支配される状況は変わらず、これを民主主義に反するとみなす民族の長たちは、1991年に別の集団を作ってこれに対抗している。現在のサルキン・ゾンゴも、彼に対立する民族集団の長もともにニアセン信徒である。また彼らはともに、ムスリム共同体の分裂は望ましくなく、ムスリムは団結すべきであると述べるが、和解に向けた対話を行おうとはしない。ニアセン教団内における民族間の不和は信徒の団結を損ない、ニアセン教団を批判するサラフィズムの伸張に対する対策の遅れをも招いているようである。サウジ・アラビアの資金援助を受けるサラフィストの組織は、設備の整った初等・中等学校を建て、また奨学金を提供することにより、ニアセン信徒の子供世代をサラフィズムに取り込んでいる。しかしニアセン教団はこれに対抗すべき有効な対策を打ち出していない。

クマシは、ある社会に導入されたニアセン教団が、導入以前に遡る宗教的・政治的・経済的背景の影響を強く受けて、「神を知る」体験を得たニアセン信徒の間にあっても党派主義を克服することができない事例である。また植民者イギリスの統治政策が、ガーナ独立後もムスリム共同体に禍根を残した事例でもある。

(4) カメルーン、フンバンにおけるニアセン信徒のイスラーム改革運動

フンバンは、バムン族の王国の首都である。旧バムン王国は、現在のヌン県の領域に対応する。バムン王はかつては伝統宗教の司祭王だったが、第17代ンジョヤ王はイスラームに改宗した。これに先立つ内乱に際して、ンジョヤは隣国バーニョのフルベのイスラームの長アミールに軍事援助を要請したが、この内乱を鎮圧したバーニョの騎馬隊の強力さに感嘆し、祈りによって信者に軍事的な力を与える宗教としてイスラームを受容した。それは20世紀初頭のことだった。ンジョヤはイスラーム的な統治者としてスルタンのタイトルを得た。スルタンはカメルーン独立後も慣習的な権威として、バムン族に対して大きな宗教的・政治的影響力を行使している。現在バムン族は約8割がムスリム、2割がキリスト教徒だが、バムン王は「すべてのバムンの父」と語られる。

ンジョヤは自分の息子たちや重臣の息子たちを、フンバンに居住するハウサのイスラ

ーム教師のもとに送ってイスラームを学ばせた。学を修めた彼らをイスラーム的な要職イマームに就け、彼らを介して影響力を行使するためである。ンジョヤの息子ンジモル・セイドゥは 1933 年に即位し、イスラームを統治の道具とする組織を完成させた。セイドゥはフンバン中央モスクを頂点とするモスクの組織をヌン県内に張り巡らした。彼はモスクのイマームの指名権を持ち、フンバン中央モスクの主席イマームを頂点としたヌン県のモスクのイマームたちのヒエラルヒーを作り、それを通じて県全土に影響力を行使した。1948 年には、アフマド・ティジャーニーの子孫であるシェイク・ベナモルがフンバンを訪問したことを機に、バムンのムスリムはすべてティジャーニー信徒になった。そこでセイドゥはヌン県におけるティジャーニー教団のハリーフア(代表者)を自称することによって、自らのイスラーム的権威をいっそう強化した。セイドゥは、毎週金曜日の朝 6 時に中央モスクのイマームたちを宮殿に集めて『ダライル・ハイラート』という祈りの本を読ませ、バムン王国の安泰を祈らせるという、現スルタンも行っている慣習を始めた。しかしバムンのムスリムの間では現在に到るまで、イスラーム以前の葬式の慣習や飲酒が行われる。またイスラームの祈りは病気治しや邪術の手段として、料金を取ってそれを行うティジャーニー信徒の学者も多い。

ニアセン教団は 1960 年頃に、ナイジェリア人であるハウサのムカッダムたちを介してフンバンに入り、従来のティジャーニー信徒の一部を取り込んだ。シェイク・アブバカル(d.1982)は、カオラックに赴いてイブラヒマ・ニアスから直接指導を受けた唯一のバムンである。現在もニアセン信徒はティジャーニー教団の中の少数派であるが、若く熱意のある信徒が多いことを特徴とする。神の認識を通じた個人の信仰の確立・強化を究極の目標として掲げるニアセン信徒にとって、従来のティジャーニー信徒たちは鎮護国家・現世利益のために教団に属しているだけであり、また彼らの指導者たちは呪術的な祈りを行って、名声や金儲けのためにイスラームを利用している者たちである。彼らは、彼らのハリーフアであるスルタンも含めて、ニアセン教団に加入してファイダを受け入れるべきである、とニアセン信徒は主張する。ニアセン信徒はイブラヒマ・ニアスをアフマド・ティジャーニーのハリーフア、すなわち全世界のティジャーニー教団のハリーフアとみなし、ニアセン教団を唯一の真のティジャーニー教団とみなすので、ヌン県におけるティジャーニー教団のハリーフアというスルタンのタイトルは、彼らにとって意味をなさない。

外国のイスラームの影響は、カメルーンの独立後にさらに大きくなった。アラブ諸国がカメルーンに大使館を置き、イスラームを学ぶための奨学金を提供するようになったので、1960 年代半ばにンジョヤの王子の一人が

リビアに留学したのを皮切りに、バムンたちはアラブ諸国で学んでアラビア語の力をつけ、フンバンの長老の学者たちの知識の欠如を意識するようになった。加えてフンバン生まれのハウサ、ダン・ラーディがナイジェリアに赴き、ナイジェリアのサラフィスト、アブバカル・グミの影響を受けて、1980 年代にサラフィズムを持ち帰った。ダン・ラーディはニアセンを含めたティジャーニー教団の独自の儀礼、従来のティジャーニー教団信徒が行うところの伝統的な葬式と、病気治しや呪いのための祈り等を激しく非難した。

1992 年に第 19 代スルタン、ンボンブオ・イブラヒムが即位した。2000 年に当時の中央モスクの主席イマームで、ンジョヤの孫であるところのポカサ・アマドゥがスーダンに留学し、サラフィズムに改宗して帰国したことが、サラフィズムの拡大を加速させた。この時、スルタンの異母弟ジャンクオ・ズネイドゥはスルタンの権威失墜を図り、ティジャーニー信徒を扇動して彼らをサラフィストと対立させたので、2000 年から 2002 年にかけて、両派の間に時に暴力を伴う抗争が起こった。スルタンはティジャーニー教団のハリーフアであると同時に、アミール・アル・ムウミニーン(信徒たちの司令官)として、すべてのバムン・ムスリムの長を自認する。そこで彼は、ティジャーニー教団の独自の儀礼ウォズィファを中央モスクで行うことを禁止した。ウォズィファはティジャーニー教団が重視する集団的な儀礼で、従来ティジャーニー信徒はこれを中央モスクの中で行ったが、サラフィストはそれを強く非難していた。ウォズィファの禁止によってスルタンは、中央モスクから両派の対立の種を取り除き、モスクの中で両派が共存することを望んだ。しかし対立は収まらず、2001 年から中央モスクは 2 年間閉鎖された。それまでこの中央モスクはフンバンで唯一の金曜モスクであり、スルタン臨席のもとに全ムスリムがここで金曜礼拝を行った。しかし中央モスクの閉鎖の間に、人々は自分の街区のモスクや自宅で金曜礼拝を行うようになり、中央モスクの再開後も、多くの人は中央モスクに戻らなかった。

この事件によってムスリム共同体の分裂は決定的になり、スルタンは宗教的権威の一部を失った。従来のティジャーニー教団の信徒の中には、スルタンによるウォズィファの禁止によってティジャーニー教団の教えに対して疑いを持ち、サラフィズムに転ずる者たちが出た。ニアセン信徒はスルタンがサラフィストに譲歩したと強く非難し、スルタンはもはやティジャーニー信徒ではないとして、スルタンからさらに距離を置くようになった。現在サラフィストは若者を中心に増加しつつあり、その最左翼の人々は、逸脱であるティジャーニー教団の信徒であり、加えてイスラーム以前のバムンの伝統儀礼を行うンボンブオ・イブラヒムには、イスラームの問題に介入する資格がないと考える。彼ら

はサウジ・アラビアやカタールの資金援助を得て自分たちのモスクを建設し、自分たちでイマームを選出する。これらのモスクやイマームは、スルタンの配下にある従来のモスクやイマームの組織とは関係を持たない。

ニアセン教団とサラフィズムは、一方は神秘主義、他方は合理主義・復古主義とその主張は正反対である。しかし、グローバル化に伴ってフンバンに導入されたこと、また功利主義的な目的で導入されたところのバムンのイスラームの、現世利己的・混淆的なありかたを強く批判し、自覚的なムスリムとして正しいイスラームを行おうとする改革主義的熱意において、両者は共通する。セネガルあるいはアラブ諸国に宗教的権威の根拠を求める両者によってスルタンの権威は相対化され、スルタンの影響力は後退しつつある。

(5) むすびにかえて

国境を超越してアフリカの広域に拡大したニアセン教団は、移植された先の社会で人種・性別の超越という本来の潜在力を発揮できない場合があった。しかし同時にそれは新しい現象を生じさせ、国境を越えた信徒の移動・交流を促進した。ニアセン教団は、イスラームにおけるグローバリズムを体現する。

(引用文献)

- Hiskett(1980) The "Community of Grace" and its opponents, the "Rejecters", *African Language Studies* 17, 99-140pp.
- Niasse(2010) *The Removal of Confusion concerning the flood of the Saintly Seal Ahmad al-Tijani*. Translation by Zachary Wright, Muhtar Holland and Abdullahi El-Okene, Louisville, Fons Vitae.
- Saani Ibrahim(2011) *The Decline of Sufism in West Africa: Some Factors contributing to the Political and Social Ascendancy of Wahabist Islam in Northern Ghana*, dissertation, McGill University.
- Seesemann(2011) *The Divine Flood: Ibrahim Niasse and the roots of a twentieth-century Sufi revival*, Oxford University Press

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

盛恵子「モーリタニア、トラルザ地方のマトムラーナ村の試み ニアセン信徒たちによる「教育都市」計画」『スワヒリ&アフリカ研究』、査読有、第 27 号 2016、pp.101-120.

盛恵子「セネガルで成立したティジャーニー教団の分派ニアセンの予備的研究 成立と拡大・タルビヤと境界の超越について」『スワヒリ&アフリカ研究』、査読有、

第 25 号、2014、pp.86-105.

〔学会発表〕(計 4 件)

盛恵子「ガーナのニアセンにおけるタルビヤの神学的理論」

日本アフリカ学会第 54 回学術大会 2017 年 5 月 21 日 信州大学教育学部

盛恵子「ティジャーニーヤの分派ニアセンのガーナにおける現状と問題」

日本アフリカ学会第 53 回学術大会 2016 年 6 月 5 日 日本大学生物資源科学部

盛恵子「モーリタニア、トラルザ地方のマータ・ムラーナ村の試み: ニアセン信徒たちによる『教育都市』計画」

日本アフリカ学会第 52 回学術大会 2015 年 5 月 23 日 犬山市国際観光センター フロイデ

盛恵子「セネガルのティジャーニー教団の分派ニアセンにおける宗教教育タルビヤ: 万人に開放された『神を知る』体験」

日本アフリカ学会第 51 回学術大会 2014 年 5 月 25 日 京都大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

盛 恵子 (MORI Keiko)

国立民族学博物館・

文化資源研究センター・

外来研究員

研究者番号: 30566998

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号:

(4) 研究協力者

盛 弘仁 (MORI Hirohito)